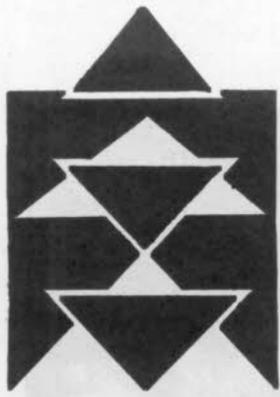


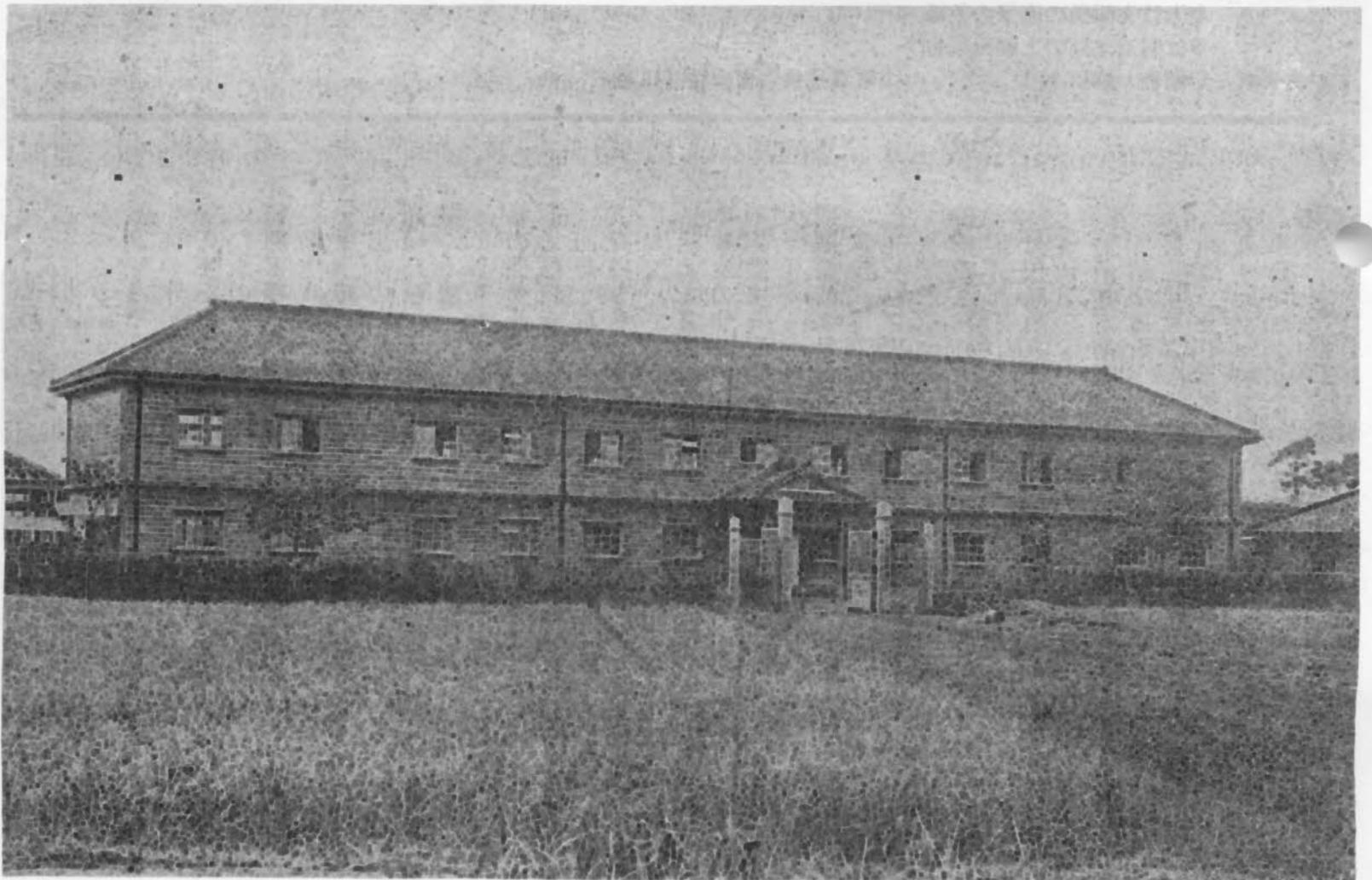
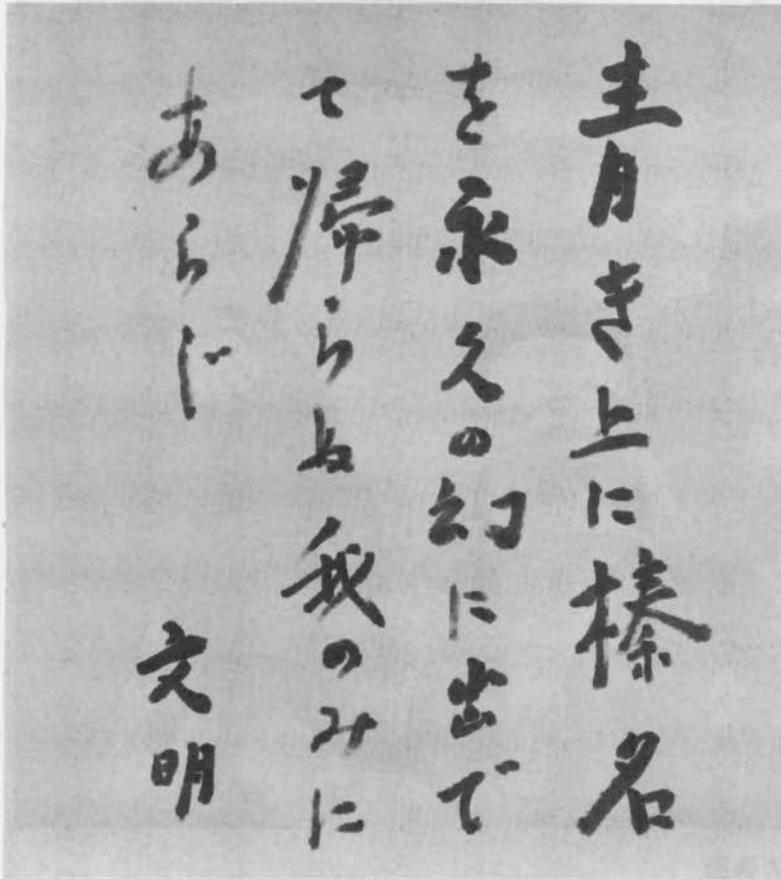
1991



高崎高校同窓会報

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074

第25号 平成3年11月30日





表紙 右上は本校職員 井田淳一氏の描かれた土屋文明氏肖像画
 左上は文明氏の直筆の色紙
 下は明治末期の上和田校舎
 裏表紙 定期戦 綱引き 写真提供 岩山猛 (49回)

高高同窓会報 No.25 目次

あいさつ.....	同窓会会長 小山 禧一	3
高ルネッサンス.....	学校長 金井 秀一	4
生徒の学習ニーズに就いて.....	通信制教頭 萩原 重樹	4
緑の下を自認して.....	副会長 田中 順	4
ふたつの生き方.....	浦野 清	5
特別寄稿		
高中時代.....	橋爪 良恒	6
中学時代から終戦まで.....	上利 嘉野	7
忘却の淵に沈めたくないひと.....	吉永 哲郎	8
高崎高校マラソン大会の歴史.....		9
論壇		
リヤカー.....	田邊 順一	10
私の回想記①		
通信教育の思い出.....	桜井寿美枝	11
回想と現在と.....	安立 清史	11
青白き高々時代.....	永井 乙彦	12
おもいで.....	川端 俊介	13
逃える青春時代.....	神保 尚武	14
卒業生の作品紹介①		
「黙する男」分部 順治.....		12
大学生からの便り／翠榊影を浮かべては.....	吉田 寛	14
同窓会だより		
母校に本の寄贈―「土屋文明私観」原 一雄著.....		15
プレハプ更衣室完成.....		15
叙勲者紹介.....		15
母校だより		
学芸部.....		16
母校職員人事異動.....		16
運動部.....		17
対前高定期戦.....		18
翠榊文庫.....		18
進学状況.....		19
同窓会会計報告・予算案.....		20
新年総会へのお誘い.....		20
事務局だより.....		20

地域にとって社会にとって、

何をなすべきか

真剣に考えよう



会長 小山 禧一

いみじくも同じ第二四号の会報に、第六四回卒業の富岡賢治君が「五十年前の建物」という題で最後にこう述べられております。

「これからの高々生にどのような高校生活を送らせたいかという視点は勿論、場合によっては、地域に於ける高々の役割、高崎や周辺のまちづくりとの関係など多様な角度からの議論が、同窓会の方々や学校側から出され一つのよい案がまとまっていくことを願っている」。

正にその通りであり、準備委員会でも十分時間をかけて話し合いを行い、同窓会だけのものではなく、生徒諸君や地域住民の皆さんのプラスになり、喜んで戴ける記念事業を行いたいと思っております。

かつて春の甲子園に高々野球部が初めて出場した折、野球部後援会長として皆様に募金を御願いしましたところ、日本全国の同窓生各位から、千円、二千円と浄財を郵便で御送り戴き、総額一億円を超えました。正に同窓会全員の皆様が母校の初出場を心から喜んで下さり、御寄付を下さったことと考へ、涙の出るほど嬉しく、又同窓生各位の心の暖かさに感激したことは、今でも忘れることが出来ません。

百周年記念事業が、母校野球部の甲子園初出場と同様に全同窓生の皆様に心から喜んでもらえる様、一生懸命努力し、良き高々の伝統を後輩につたえてゆく一コマとし、これから迎える新しい二十一世紀を後輩諸君にキッチリとバトンタッチをしたいと念じております。

御指導御鞭撻の程よろしく御願ひ申し上げると共に、同窓生各位の御発展と御健勝を御祈念申し上げます。御挨拶と致します。

(美峰酒類醸取締役社長 42回)

今年の夏から秋にかけて低温多雨の気候の上、週末になると必ず台風が本土に襲来し、洪水や土砂くずれ等被害が多く、その上農作物等の不作も響き、

我々の日常生活にも大きな影響を及ぼしておりますが、同窓会の会員の皆様には御元気でいらっしゃるかと御喜び申し上げます。

会長就任のはじめの御挨拶の中で、大変悲しい御報告をしなければならぬことは、誠に残念なことであります。

今年の五月、長い間同窓会の役員として、母校発展のためや同窓会の活性化等に御苦勞戴きました柴山大五郎前会長が、薬石効なく御逝去されました。

柴山先輩は前々から御自身の病気のことは御承知されておられたようで、「私はあまり永く生きられないよ」とおっしゃられておりました。私共は「そんなことはありませんよ、元気で頑張ってください」と御願ひしておりましたが、病気で同窓会のためには働けないからと言われ、今年の一月の総会で辞任

されました。その責任感の強さといさぎよさには感動致しました次第です。

六月一日の音楽センターにおける葬儀は大変盛大で、ありし日の柴山先輩の人格を偲ばせました。

私も参列させて頂き、同窓会の皆様を代表し弔辞を奉呈してまいりました。ここにつつしんで柴山前会長の御功績に心より感謝申し上げますと共に、皆様と御一緒に御冥福を心より御祈り致します。

さて数年後に母校創立百周年を迎えます。

その記念行事実施について準備委員会が発足したことは、先の第二四号の会報で御報告致しました通りで御座居ますが、百周年を迎える高々に学んだ我等同窓会の諸君が、ただ単に同窓会のためにのみ考えた記念行事ではいけないと考えます。地域にとって社会にとって、何をなすべきであるかを真剣に考える必要があると思えます。それによって高々の存在が地域の皆さんに認められ感謝されることが出来ると思えます。



高高ルネッサンス

校長 金井 秀一

「春風や闘志抱きて丘に立つ」(虚子)
こんな決意を胸に本校に着任してから、早くも一年半が過ぎました。この間、同窓会の皆様には温かく力強い御支援・御協力を賜り、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

この五月、柴山前会長さんが御逝去されました。高崎高校同窓会の副会長・会長として、永年に亘り本校のため献身的に御尽力下さり、感謝のことばもございません。教職員・生徒一同心より哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申しあげます。

さて母校の現況であります。平成二年度の大学入試結果も、別表のとおり質量共に上昇し、現役合格率も五割の大白を超えることができました。厳しく充実した授業に加え、労を惜しまぬ補習等先生方の非常な努力と、それによく応えてくれた生徒諸君の真剣なとりくみ、御家族の協力を敬意を表します。次に母校便りにも詳述してありますが、しばらく低迷していた部活動にも曙光がさしてきたような気がいたします。全国的な私学大躍進の中、公立進学校として文武両道の理想を貫くことが、極めて厳しい状況下にあることは事実ですが、各部共かつての黄金時代復活を期して奮起しております。



生徒の学習ニーズにこたえて

通信制教頭 萩原 重樹

この四月の人事異動により高崎高校通信制の教頭として赴任致しました。まもなく創立百周年を迎える歴史と伝統のある高崎高校の同窓会副会長と、勿論その器ではありませんが金井校長先生の方針のもと、高崎高校の益々の発展のために、微力ではありますが、誠意と情熱をもって努力していきたいと思っております。

さて、高高には全日制と通信制の二つの課程があります。全日制では、先生方の熱心な指導と、生徒の学問に対するひたむきな努力とが相俟つての成果であると思っておりますが、平成二年度末の大学合格者数は、東大十三名を初めとして延べ八五六名にものぼると知り、さすが果下一の進学校としてその名の知られる高崎高校だと思えました。実に素晴らしいことです。加えて「文武両道」を教育方針の一つに掲げ、校長先生を先頭に、教職員、生徒が一丸となって進む様に、高高百年の伝統の重みを感じました。必ずや、高い理想を持ち、社会にとって有為な人材が先輩の後に続くものと確信します。

次が勤務する通信制ですが、勤労青少年等に対して教育の機会を提供するため、昭和二十三年、高高通信制が発足しました。以来四十三年間、様々な理由により全日制課程や定時制課程に通学出来ない青少年、勤労者、主婦あるいは身体障害者等多数の生徒が学び、今年三月末までに三三二名の卒業生が巣立って行きました。現在では十五歳から最高齢者七十三歳までの生徒五七一名が在籍し、その約半数が自学自習による勉学に励んでいます。

最近では生徒数の激少、全日制中途退学者の増加、身体障害者だけでなく心に障害を持った生徒の入学等、様々な問題を抱えての通信制ですが、通信制だからこそ個々の生徒の学習ニーズに対応出来るのだと思っております。これからの高校教育は、全日制、定時制、通信制を問わず生徒の多様化、個性化に伴い、個々に応じた教育が一層必要になってくるものと考えます。

生涯学習が叫ばれている今日、高高通信制も生徒が生涯にわたって自ら学ぶことの出来る「自己教育力」の育成を目指し、全職員、力を合わせて努力していきたいと思っております。今後とも皆様のご協力をお願い申し上げます。ご挨拶と致します。

縁の下を自認して



副会長 田中 順

このたびの役員改選に当たり、皆様のご推挙をいただき、輝ける伝統と麗しき友誼溢れる母校同窓会の副会長末席を汚すことになりました。

身にあまる光栄というよりも、先立つ不安は隠しきれません。その重大さに押し潰されそうで、身の引き締まる思いで一杯でございます。

もとより若輩にして浅学非才な者でございます。しかし、母校愛は人後におちないと自負しておりますので、皆様の格別なご指導とご鞭撻を賜りますれば、この重責も果たせるものと思っております。

ご案内のように、六年後の平成九年は、母校創立百周年、百賀の祝になります。昨年、百周年記念行事準備委員会が発足し、具現化の端緒についたところでございます。

会長の指示により、高崎中学・高崎高校関係者が諸手を挙げて慶祝出来ませうよう英知を傾注し、地域に同化した記念事業が生涯学習の拠点と共に、同窓の心の依拠する所として、前号の会長のご挨拶のとおり、地域社会におけ

る教育・文化の面での貢献の一助となり得たいものでございます。

ご高承の高崎高校の所在する高崎市は、西暦二千年に市制百周年を迎える全国唯一の都市でございます。高崎高校創立百周年がそのプレステージとして連動する位置付けが出来ます。

公民一致事業を展開する視点も必要となります。

戦後第一回目の入学生（第五十回入学生）として、昭和二十一年に乗附の高崎中学に入学した私達は、学制改革の煽りをくらい四年間の最下級生としての憂き目をみました。誠に有り難い体験をいただきました。今の世界の価値観の転換と比すべき同様な日本の激動期を感性豊かに、戦争と平和の姿を身をもって経験してまいりました。

高崎中学・高校での縁の下の宿命を誇りとして母校のため微力ではありませんが精一杯、尽瘁いたしたいと存じております。同窓各位のご叱正を切にお願い申し上げて就任挨拶とさせていただきます。

(田中歯科医院院長 51回)

ふたつの生きかた



副会長 浦野 清

学業をおえて職につきますと、誰しも職域や仕事の関係を中心に人間関係がひろがっていく傾向がございます。

ときには結婚さえも職場でむすばれ、上司のお仲人で社内パーティのような披露宴をやるケースがザラです。すこし重い役職につくようにもなれば、もう生きざまの多面にわたって、

「会社人間」「業界のひと」になりきってしまう。創業者でもないのに「京王の浦野です」が極くしげんに口をつけて出て、しかも「しごと世界」だけではなく生活全般のすみずみまでにその意識がしみ通ってしまわけてです。

その是非をここで論ずるつもりはありません。申しあげたいのは、幼児体験から高校・大学まで人格形成に最もだいじな時期を経てきて、その一生の心の原点をその後もたえず思い出し、ときには旧い友人と触れあい、かかわりをもちつづけることがどんなに素晴らしいことかということですが、

「一生の心の原点」と申しましたが、それをたしかめることも絶えて、心の無国籍者のように仕事人生を漂流して

いくのみであれば、たとえ大臣・博士になろうとも、まことに淋しい生き方といわざるをえません。

現役まっ最中の方々も、これから未来を拓いていかれる若い諸君も、片時も心の原点・高々同窓会からはなれることがあってはなりません。

自身、疎遠に打ち過ぎし五十年の歳月をかえりみれば、こんな口はばったいことを言えた義理ではありませんが、穴埋めのつもりでいまは京浜同窓会の世話役です。われらがかつて言われた「これからは一党員として球拾いに徹する」の名文句のとおり、京浜方面のよろず走り使いをかってるつもりです。

いま同窓会の最大の課題は、小山会長がいつもいわれる百周年行事です。われわれの目標は六年後にはありません。それまでの六年間にあります。準備委員会もできておりますが、一層加速させる必要が迫っております。校友諸兄の心の原点への回帰とご協力を心から期待いたします。

(京王百貨店相談役 43回)

特別寄稿

高中時代



橋爪 良恒

足音と、やがては破滅へとまっしぐらに突き進んでいく様相の中で、後半の二年程は満足な授業もなく、学力のない学年が文字通り学力もないままに、あっという間に通り過ぎてしまったという感が深い。

しかし、そのことがかえって、勤労奉仕や工場への勤労動員などを通じて、お互いの青春の絆を強め、先生方の学校の外での素顔に接することにより、人間としての教師を知ることになり、卒業後の結びつきを強めることになったのかも知れない。五年生になってからは、早々に勤労

上和田の校舎から乗附へ移ってはじめて、丸々五年間を新校舎で過ごしたのは、われわれ四十四期生からである。従って、昔の上和田校舎は知らないし、引越しの苦勞も経験していない。この年から定員増になって二百名となったが、後々までも、この学年には馬鹿が五十名いるといわれ、口惜しい思いをしたものだし、それがいつしか心の隅の方へ沈澱して、上級生に対するいわれなき劣等感を植えつけることとなった。それに入学試験も内申書と口頭試問だけで、先生方からは学力がないといわれるし、さんざんであった。時代も翌年には第二次大戦がはじまり、ひたひたと押し寄せてくる戦争の

動員令が施行され、岩鼻の火薬廠、小島機械、磯部金属と、ほとんど毎日軍需工場へ通勤し、学校へ戻るのは月のうち数回、教科書などあったのやら、なかったのやら思い出せないほどのひどい学校生活であった。そのかわり、日常生活での思い出はふんだんにあり、教師や工場の監督官の目を盗んでの、飲酒、喫煙をはじめとする悪戯鬼騒ぎには事欠かない。

「エムケトル」(語義については「想像あれ」などというグループが生まれ、窮屈で自由のない戦時体制の中で、それなりに暗鬱な青春を謳歌して、ひそかな楽しみにふけた。戦後だいたったってから、この会は「猿狓(さんげい)会」と名称を変え、いつでもやれる同窓会のようになり、二カ月に一度ぐらいずつ集まって、旧交をあたためあっている。因みに「さんげい」という名称は、医師の吉川文夫君の命名で、「獅子」すなわち「四四」、「四十四回同窓生」を指す。獅子を描いて猫にもならぬ現状ではあるが、良寛禪師の詩ではないが(人あつてもし箇中の意を問わば、これはこれ従来(栄蔵生)、歳をとってくると、何のわだかまりもなく、一気に中学時代の誰某に戻れるのも、数少ない楽しみの一つである。

四年、五年は軍関係の学校へ志願する者多く、クラスが一つ減ってしまうほど、修学旅行もなく、卒業式など誰かが記憶にないほど、惨憺たる高中時代ではあったが、今となっては、暗い影の一かけらもないほど、清澄な風景だけがよみがえってくる。

どのクラスも同じだろうが、定年前後からめっきり同窓会の出席率がよくなっていく。と同時に、櫛の歯の欠けるように、この世を去っていく友の数も多い。われわれの期は、戦争で死んだ者はいないのに、物故者三十七名の多きを数える。戦争中ろくなものも食わなかったのに、血液が貧しいんではないかと自嘲もしてみるが、そんなこと埋められないほど、寂寥の感に堪えない。A君は、二十一世紀の元旦を万里の長城で迎える会をつくらうと提唱している。余命は誰も知らないが、せめて生きてあるうちは、精一杯頑張りたいものである。

還暦を過ぎた頃、誰いうともなく、現在の自分を何か形あるものとして残せるような本をつくらう、という話が持ち上がった。四十一期の「流水」や四十二期の「華甲」に触発されたこともある。ようやくにして腰が上がったのは、一昨年の秋であった。六十歳を既に二年も過ぎていた。さまざま迂余曲折はあったが、今年の夏、「高四十四回同窓会還暦記念誌さんげい」が、ようやく出来上がった。われわれは毎年八月十五終戦記念日前後に、同窓の集まりをもっているが、去る八月十七日、出版記念会を兼ねて総会が開かれた。まあ、一つの峠を越えたということだろう。

「戻れる」場所があるというのは、いいことである。同窓会というものを、いつの頃からかそんなふうに見えるようになった。

若い人たちに、歳をとってからのことを言ってみても詮ないことだが、せこましい高校時代でなく、がむしゃらに自分を試してみる青春を送ってみたい。それが、振り返ってみるとき実にいいものである。

(高崎白衣観音慈眼院住職 44回)

特別寄稿

中学時代から終戦まで



上利 嘉野

のすそは規定の幅かなど厳しく
チェックされた。ポケットにた
ばこのかすなどが見つかるた
いへんなことになった。

映画館や喫茶店はオフリミッ
トだし、厳しい服装検査などす
べては質実剛健の精神を養うた
めのものであった。昭和八年に
樋口校長から湯沢校長に代わっ
たが、両者とも質実剛健をモツ
トとする校長であった。同窓
会報第24号に、金井現校長赴任
の挨拶文で、対前高定期戦の応
援に二十名の有志が午前四時学
校に集合し、下駄(ほうば)ば
きて四時間余りかけて踏破し、

開会式前に前高に到着した、という内
容を読み、質実剛健の気風ここにあり
と感激した。

私は昭和五年に入学したが、翌年
は満州事変、七年に上海事変が発生す
るなど、まさに軍国調華やかな時代に
在学した。当時の卒業アルバムを開く
と、まず質実剛健、自治向上、感恩報
国の校訓が掲げられ、ページは営内宿
泊、御親閲記念、大演習、査閲など軍
事に関する写真で埋められていた。
正門を入ると小さいが立派な造りの
皇太神宮があり(これは御真影や教育
勅語を奉安した建物と思われるが)、
登校時最敬礼して校庭―教室に向かっ
たものだ。朝礼には全員が校庭に整列
し、校長の訓示に始まり、服装点検な
どが行われた。いがぐりの頭髪の高さ
や、ボタンがとれていないか、ズボン

御親閲を受けた。天皇陛下の群馬県行
幸は四十一年ぶりとか、この機会に接
する光栄に感激したのである。

私達のクラスは、一四一名中四十八
名の進学率34%である。現浪合わせて
現在の進学率75%前後には隔世の感が
ある。進学を職業別に見ると、当時軍
需産業拡充が最大目標だったから、工
業技術系進学が十三名と一番多く、医
師、教師の学校がともに十一名ずつ、
軍国調盛んな時代にかかわらず、軍人
は陸士、海兵で三名であった。私は親
父が医者なので、まわりから医者にな
るのをすすめられ、一方姉が陸軍軍人
に嫁いでいたので、そちらにも気が向
き、多少迷ったものの、結局は技術畑
に進む決心を固め、桐生高工に進学し
た。

大正十四年に陸軍現役将校が各学校
に配属され、生徒に軍事教練を実施し
てから満五年を迎えていた。当時の配
属将校は温和な園田少佐だったが、昭
和七年初めに出征したので、代わって
瀬能大尉が配属された。軍人には珍し
い小柄な人であったが、幼年学校出身
で軍人精神はまことに旺盛であり、ま
して私は射撃部員だったことから人一
倍鍛えられた。九年に先生の服装が海
軍調の制服に統一された。同年の十一
月に県下を中心に陸軍大演習が行われ、
五年生だったわれわれは乗附練兵場で

桐生に入ると、三年生に柴山大五郎
先輩(32期)がおり、射撃部の委員長
であった。更に2年前に加賀美保先輩
(30期)が委員長をしていたのである。
早速すすめられ射撃部に入部した。三
年生のとき私も委員長に選ばれ、高中
卒が一年おきに委員長を務めたことに
なる。このときの配属将校は広瀬工兵
大佐(軍神広瀬中佐の遠縁とか)で、
たいへん立派な薫陶を受けた。桐生二
年生のとき、幸い海軍委託生の試験に
合格したので、軍人になりたかった夢
も叶えられ、卒業後は海軍技術士官と
して終戦まで奉職した。

クラス会は毎年群馬の温泉地などで
開いているが、現在連絡の取れるもの
六十数名中二十五から三十名が出席し
ている。中学時代のエピソードを語り
合い、現在までの処世経験を話し合い、
興が乗るとカラオケ、詩吟、はては踊
りなど、それぞれの趣味の十八番が披
露される。年老いて人生をより豊かに
送るには、なんらかの趣味を身につけ
ておくことが必要と思う。私は歌が苦
手でダメだが、ゴルフ、日曜大工、囲
碁、書道など、日常が手持ち無沙汰に
ならない程度に趣味を生かした生活を
送っている。最近篆刻をはじめたので、
その拙作をご笑覧いただきたいと思う。

(京浜高々同窓会会長代行・
伊豆国際CC役員 34回)



借老同穴

一九九一年中秋

伊豆 刻

「借老同穴」詩経から。生きてい
るときはともに老い、死んでからは同じ墓
に入るの意。夫婦の愛情が固く結ばれ
ていること。

特別寄稿

忘却の淵に沈めたくないひと



吉永 哲郎

された浪沢孝輔の「ランボー現象」の一節である。ランボーの故郷シャルルヴィルはベルギー国境に近いフランスの地方都市である。この地方都市の風物を眺めながら、二人の詩人をして高崎を想起せしめた橋本一明を、わたしは忘却の淵に沈めたくない。人から忘れ去られてしまうことも、その人にとって幸せなことであるかもしれない。生き残った者が勝手気ままに追想することは、思いあがった驕りととられるかもしれない。が、どうしてもこの身勝手を許して欲しいと思うことがある。青臭

離れて一層強く思う。地方の高校に執着する田舎紳士の発想であるのかもしれない。しかし、それが我田引水になろうとも書いておきたいことがある。悲しい現実であるが、先頃亡くなられたアララギ歌人土屋文明が高中の同窓生であると卒業生がすべて理解していたとは考えられない。こうした例を挙げるときりもない。故人に眼つめても、大手拓次（詩集十一月に岩波文庫で刊行された）・橋外男（直木賞作家）・金鶴水（昭和41年文芸賞）らの文学活動はわずかな人達にしか知られていない。あえて文芸面にこだわるのは、世間で描かれていない高次のイメージに少し挑戦を試みたいからである。

にさ青の太陽は溶けこむさうしてはるばると潮の流れる耳もとちかく／かれは一つのなつかしい言葉をきく／お兄さん！ お兄さん！ お兄さん・／ああ こんな恍惚の夢のやうな日は／どこかの海邊で待ってゐるのか」（昭和十九・五向陵時報）。この詩と橋本の「ドビュッシーの葬儀」「きみの棺は海に沈めようロードよ／やがてみどりの藻の愛撫がきみをつつむだろう／そうだ、きみの墓地には海がいちばんにあわしい／なぜなら、ぼくの住んでいる陸には、きみにふさわしいやすらぎの／場所がないから」を読み比べると、時を離れて創られた詩であるが、底に流れる友からの影響を読みとれる。

……シャルルヴィルの町を歩きまわって、そのなんとも退屈で殺風景な市街の印象は「これは高崎だな」と飯島耕一がいった。ぼくも直ちに同意した。二人とも高崎をそれほどよく知っているわけではない。たまたまそれが出てきたのは、橋本一明の故郷だったからだ。「高崎だな」というのは一種の暗号であった。二人とも口には出さなかったが、あのすぐれたランバルディアンンの追悼のためでなかったら、果たしてシャルルヴィルくんだりまで出掛けていたかどうかかわからない。

い言い方であるが、高崎中学・高崎高校の名称のもとにやがて百年になろうとする今、この近代の流れの中で、いったいこの学校やここに学んだ者達は、何をしてきたのかという問いかけに、正面から答えられるものをもっているだろうか。いまさら何をいつているのかいわれよう。が、こうした問いかけに答えをもっていないことも、なにかしら母校とは気になる存在である。気になりだしたら現役を離れた時間に身を置いていることになるのかもしれない。その一方で、いつそのことかわかりをもちたくなってしまう。十三年間母校の教壇にたつて日々考えていたこと、できなかったことを母校を

橋本一明（一九二七―一九六九）は四三期の卒業生である。畏友原口統三（一九二七―一九四六）の遺稿集「二十歳のエチュード」をまとめた。遺稿集を整理することにかかりきっていたために、大学入学が一年遅れた。畏友の死のショックの大きかったことが思われる。橋本が生涯の研究テーマにしたアルチユール・ランボーは原口統三に教えられたのであった。十七歳の原口の習作「海に眠る日」はランボーの「永遠」の一行「海に溶け込む太陽だ」をエピソードにした作品である。「彼は眞晝の海に眠る。／茫洋たる音楽のみどりに觸れあふ／はるかな／曇気樓の奥深くかれは眠る／とほく水平線の波間

恩師鈴木信太郎をして言わしめた日本のランボー研究第一人者であった橋本のそのランボーへの道は、この原口の詩から続いていたのであった。

この夭折した詩人の魂を伝えたいと卒業生を送るたびに思った。そして、夭折した詩人達の詩集を刊行したかった。翠巒叢書なるものをつくって。橋本の友人、丸谷才一、中野孝次らの活躍をみるたびに一層この感を強くした。

この文章は雑誌「ユリイカ」に掲載

シャルルヴィルとメジエールの境を流れるムーズ川に面してランボー一家の住んでいた家がある。わけもなく三年程前に橋本の幻影を追って私はそこに佇んだ。そこで忘却の淵をみた。

（54期・県立前橋女子高校教諭）

高崎高校マラソン大会の歴史



高々のマラソン大会のルーツは、大正7年（一九一八）に5月20日が高中の創立記念日に制定された記念行事として、八幡神社大門までの二里二十四町の長距離走として始まった。一時中断して昭和11年に復活。再び戦争などで昭和18年頃から中断したが、昭和24年秋に新制高校の第一回前高定期戦を開始したのを機会に、校内マラソン大会も再開しようと生徒会で議論になり再開することを決定した。

25年2月に第一回の校内マラソン大会が行われる予定だったが、厳冬期で道路事情が悪く中止。新学期になって改めて開校記念日の行事として、25年5月19日に第2回マラソン大会として八幡神社大門前折り返しコースで再開された。（第1回は中止となった）

交通事情が悪化した事により八幡大門コースは第18回（昭和41年）で変更され、吉井線折り返しコース、農大二高折り返し学校周辺コースで2回ずつ行われ、第23回（S46・一九七二）から現在のコース（護国神社前→コロニー→観音山→カッパピア→学校正門）になった。

その後、開校記念日の大会は気温の異常に高い日等があつて健康上良くな

いのではないかと県教委等からの指導もあり、秋以後に行う事になった。39回（62・11・12）40回（63・12・20）41回（平成元・12・15）42回（2・12・14）43回（3・10・31）に行われた。42回（H2年）までは開校記念行事ということである程度の仮装をして走るのは黙認されていたが、高崎警察署からの道路使用許可条件の指導などもあり仮装等で走るのは禁止。

43回大会は千八百八十人全員がきちんと走った。バスケット部の猪股（2年）が優勝し、久し振りに陸上長距離陣を破り話題になった。

大会終了後の表彰式には学校賞、体育賞、運動部長賞（トロフィー、メダル、副賞）が贈られ、翠辮体育賞として翠辮体育会会長からの運営状況と各運動部への激励のメッセージがあつた。上位者（6名）にトロフィーが贈られ、各科賞、個人賞が各先生より着順指定で当たる賞品授与があり、特に芸術科賞（井田先生）のパリ郊外のスケッチに人気があつた。

和気あいあいのうちに購買賞（松浦パン）、運動具店賞（ホシノ）、真下賞などもいただいて閉会となった。

（運動部長・富田裕二 49回）

リヤカー

田邊 順一



函館に独りて暮らしている老女がいる。毎朝七時すぎにはリヤカーを引いて山手地区の一角にやってくる。焼きいもを売るのである。一日の売りあげは千円。利益は二、三百円にしかないが、それ以上は決して望まない。毎日のことだから、無理がくるということを知っているからだ。五、六本の芋がなくなると、さっさと引きあげる。彼女の家には電気も水道もな

い。自分の意志で切って貰ったのだ。親から受けついだ2Kのこの家は手入れができないほど老朽化してしまっていた。月々の経費を考えるとそうせざるを得なかったのだ。明るくなったら起き出し、暗くなったら眠る。必要があれば天井から下げた懐中電灯の灯りて雑誌位は読める。無ければ無いでなんとかなると笑っていた。

家に帰ると編みものを始める。これまでに百数十枚のクッションカバーや帽子を編みあげ親しい人に配った。彼女の胸を暖めてくれた人たちへのお返しだ。毛糸は頂戴してきた古着のセーターをほどこいたものだという。

北国の冬は厳しい。電気のない彼女は暖を湯タンポでとる。一日三回、プロパンガスで温め直し下半身を布団に包みこんで日中をすごす。

そんな彼女の暮らし方を垣間見て、変人呼ばわりをする人もいる。何故生活保護を受けないのかと問う人もいる。また、彼女のかたくなさが痛々しいと口にする人もいる。一方でパンの耳を毎朝黙って届ける老女もいる。芋が売れ残ったら、必ず持って来てほしいと口

をかける人達もいる。

四十年間、リヤカーをひいて歩いてきた彼女は、人の暖かさを人一倍感ずるのである。

三年前の冬、二度目に訪ねた私に老女は自分の生い立ちから現在までのことを淡々と話してくれた。生活保護という制度も、三十何年前に一度だけ受けたから知っているという。夫が病んで倒れ、老母と二人の幼児をかかえ行商をしている時に腰を痛めて動けなくなったのだという。この時の屈辱感が未だに忘れられず、だからこそ、人並みでありたいと思って現在の暮らしを選びとったのだ、と彼女は言うのである。

そう語る老女のどこにも何の気負いも驕りも感じなかった。

老女の家を辞去した時には冬の陽は落ち、辺りは部屋の中同様に暗くなっていた。自己の足らざるところのすべてを口にし、申請しなければ電気も水も手に入らないこの国の福祉とは何なのか、と思ひながら凍てついた道を帰途についた。

また厳しい冬がやってきた。

(写真家 55回)

私の回想記

通信教育の

思い出

桜井 寿美枝

巷間、高崎高校の通信制課程（八十単位以上履修）を四年間で卒業する事は、至難の事との話が噂されていた。

ふとしたきっかけで、五十歳を過ぎた農家の主婦である私が挑戦することになった。凡そ、勉強とは縁遠い状態にあり、ましてや高校の教科を勉強するなどとは思ってもいなかった私にとっては、誰しもが危惧の念を抱いていた。そればかりか、今更と、半ばあきれた見方や風評が、再三耳に入ってきた。

しかし、持ち前の意地が頭を上げ、何としてでも卒業しようとの一念で入学に踏み切った。

しかし、入学したものの、予想に違わず、勉強の内容は難解そのものであった。さりとて、途中で投げ出すわけにもいかず、それに、家族の理解と協力を思うと、何が何でもと必死の思いの毎日であった。

何れの教科も全て初歩の段階からつ

まずき、入学を後悔することも一再ならず。しかし、入学した誰もが私同様の立場にある方々が多く、一方では意を強くすると共に、逆に励まされることが多かった。学問には王道もなく、年齢もない事が痛切に思われたのも、一つの大きな収穫であった。

苦心惨憺を地ていった私の高校生活も、四年目に入り、いよいよ卒業かと胸をなでおろした矢先、千慮の一失ならぬくも膜下出血、というダメージに見舞われ、再起は言うに及ばず、生命の危険にさらされてしまった。

入院、そして手術。経過は良好と、私に再起の喜びと希望を与えてくれた神の配剤に、生きていることのすばらしさと、生命の尊さを改めて知ることができた。幸い、退院後の経過も順調で、学校にも復帰でき、病床にあっても頭から離れなかった「卒業」と言う事実をこの手に収めることができた。

これも多くの先生や友人達のおかげだと、改めて感謝している次第……。その上、病み上がりの私に、答辞を読むという荣誉が与えられた。

私の生涯を通じて、これ以上の感激は再び訪れないことだろう。

稚拙な文章を綴ることの恥ずかしさも忘れて、一文を認めたが、私の五代こそ正に青春そのものであり燃焼でもあった。

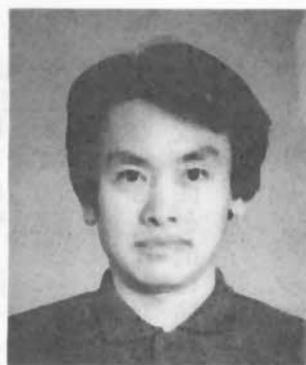
高崎高校の同窓会の会員として名を

連ねることのできた喜びが、残された人生において、大きな原動力となることを心に期して、今日を、そして明日を生きていきたい。（通信制・31回）

回想と

現在と

安立 清史



私は現在、東京都清瀬市にある日本社会事業大学という社会福祉を専門とする大学で、社会学・社会心理学を教えている。

社会学といっても広いが、専門は都市社会学、環境社会学で、都市における地域環境の変化や高齢化社会の諸問題などが現在の研究テーマである。

ところで高崎高校を卒業後、1年間の浪人生活を経て、ようやく東京大学



中庭

文科3類に入学したのが一九七七年だから、もう十四年前だ。その後、文学部社会科学科へ進み、大学院博士課程まであわせて十年間も大学に在籍していたことになる。

大学の教員になってからは、まだ五年めなのだから、学生時代はまだ回想の彼方などではない。ついこの間、学生から足を洗ったばかりの者の話として読んでいただきたい。

高高度の私のクラスメートは、ほとんどが浪人した。全滅に近かったといっている。何故か。みんな、自分の合格出来そうな大学ではなくて、自分の行きたい大学だけを受験したからである。私もそうだった。担任の木村仁先生などは悠然として何ひとつ進学指導はなかったと記憶している。

思えば良い高校時代だった。その後二転三転した共通一次試験などが導入されて、世の中の受験生が、単一の尺度(偏差値)で順序づけられる以前の懐かしきものどかな時代である。

みんな好き勝手なことを一生懸命やっていた。私も文芸部(今でもあるだろうか)に所属し、受験に無関係な本ばかり読んでいた。勿論、受験には弱い。しかし、学ぶ範囲が限定されている受験制度という土俵の上のことだけに振り回されていても仕方がないのだ。本当の問題は、その先にある。

今の大学生を見ていて気づくことは、

高校時代から自分の興味や関心を独自に掘り下げるといって、自分自身へ向けた意識的な努力を始めなかった学生は、大学に入った途端、急に空虚になってしまう、ということである。受験が終わってからは自分自身を見つければよいと思っても、そう上手くはいかないのだ。彼らにとって高校時代は、ほんとうに受験技術の習得のみに消費しつくされてきたかのようだ。そして大学に入ってからおもむろに自分を見つければよいとあがき始める。しかしそれでは遅いのだ……。

いや、偉そうなことは言えない。十年間も大学・大学院に在籍しつつづけてなお、私は自分自身の学問や研究のアイデンティティを求めてもがき続けている。

伝えたかったのは、そういうことです。

(日本社会事業大学・社会福祉学部・助教授 75回)



青白き

高々時代

永井 乙彦



受験数学を卒業し、何と相対性理論の解説にいそんでいた。

高々の数学部とはそういう場なんだと、一種のカルチャーショックを覚えた。私も大いに背伸びし、受験数学を先取りし、部活では群論という当時としては未知の領域に取り組んだ覚えがある。

翠巒祭でも群論を紹介したが、たいした指導もしなかった後輩たちが、女子高生と見るや、得々として、理路整然と説明する光景に、高々生の優秀さを再確認することもあった。

小柄な私も声だけは大きかったせいにか、全校生徒を前に演説する機会があった。当時、大学紛争の火の手が燃え盛り、全共闘がマスコミを賑わせていた。そのさ中、校内弁論大会であえて右寄りの憲法批判、教育批判を展開した記憶がある。ヤジも罵声もなく、後で頭をこづかれる事もない平穏な高々であった。

卒業記念の寸言集に印象深い一文があった。受験技術の錬磨に埋没する高々生への痛烈な自己批判であった。青白き受験生に属した私には、それが中学時代からよく知る生まじめなN君の三年間の総括だっただけに、今もって忘れ得ない。

大学では取れるだけの講義を目一杯選択した。高々での受験勉強をあくまで一つの過程と位置づけたかったか

らだった。

現在の私は公認会計士・税理士という鑑をかぶり、高々時代のままに青白きインテリ風を続けている。

本当は、鑑を脱いても飯が食える自分を夢想するが、それはいったいいつのことであろう。

(公認会計士・税理士 69回)

おもいで

川端 俊介



私が甲子園に出場してから、早いもので十年がたちました。大きくてきれいな球場、そんな印象が残っています。甲子園練習の時にたっぷり砂をとっておき、四日目の第二試合に石川の星稜高校戦に臨みました。

投げては打たれ、投げては打たれる。投げる球がなくなり、結局十一点も取られませんでした。スローカーブを投げる余裕もなく、ただばくぜんと投げていた、そんな記憶があります。これほど打たれたことはなく、私は甲子園に素晴らしいと同時に怖さも教えられました。

今でも時々思います。あの時、なぜああしたのか、なぜこうできなかったのか、と。そして、みんなていい思いをしたかった。

思い起こせば、毎日三百球近く投げた打撃投手、倒れてしまいそうな個人ノック、清水寺の石段、いつやめようか、雨が降らないかと考えていたころ、何も考えず夢中でボールを追いかけたころ……。

甲子園出場を、だれが考えただろうか。試合に出る、それだけで嬉しかった。背番号一番をつける。それだけで私の高校野球は満足だったのに。

秋季大会、ここから奇跡が始まりました。群馬県大会優勝。修学旅行へ行かずに関東大会の行われる水戸へ向かった。修学旅行のように、みんな楽しそうだった。一回戦は勝ちたいが……すぐ負けると思っ替えて持たない者が多かった。

しかし、予想に反して、関東大会準優勝、甲子園当確。信じられなかった。どの試合もそれほど大きい試合とは思わなかった。

卒業生の作品紹介 <7>

「黙する男」

分部 順治



(1940年作)

紀元二六〇〇年奉祝美術展覧会に出品した作品で、小生二十九歳の時の作です。自分は黙して人の言葉を聞いて相手の心を知るということを意図して作ったつもりです。

(彫刻家 27回)

考えてみれば、すごい選手がいたわけでも、特別な練習をしたわけでもない。ごく普通のチームがあたりまえの練習をし、考えた野球をした。それだけだった。何か不思議な力が働いたのだろうか。

ありがとうと言ってしまおう。甲子園に「翠巒」が響きわたっている……。

これから先は後輩たちにお願ひしたい。今度は私たちをアルプススタンドへ連れて行って下さい。

(藤岡市立小野小学校教諭 81回)

ビデオで当時の試合を見ると、アルプススタンドで、先生方、OB、友達……だれもが熱心に応援している。その姿に胸が熱くなり、何度も何度も

迷える青春時代

神保 尚武



〔片田舎から小都会へ〕

現在の吉井町大字多胡に生まれ育ったわたしは、旧多胡村の小学校・中学校に通学しました。村の過疎化のために中学校の方はすでに廃校となりました。このような片田舎に育ったわたしには、高崎は大きな町でした。

高崎高校に入学した時には、いわば多くの町の生徒に巡り合うこととなったわけで、たいへん緊張した毎日でした。

〔迷える羊〕

最初は高校生活に多くのとまどいを感じ、なかなかじめませんでした。また、青春時代の初期の悩みに翻弄されて、授業にはそれほど身が入りませんでした。

それでもクラブ活動の方は、英語部を中心に、文芸部、生徒会と比較的に

熱心にとりくみました。

〔静かな反逆〕

振り返ってみますと、高校時代のわたしは静かな反逆児であったようです。勉強は英語を中心にやっておりましたが、受験体制に強く反発しました。英語の弁論で「制服を廃止せよ」とか「大学入試制度は間違っている」というような勇ましい題で大会に出ました。群馬県で優勝したり、「チャールズ杯」の全国大会で上位に入ったりしました。

英語を含めて、受験勉強はあまりやりませんでした。とにかく興味がわかず、問題集のくだらなさにはうんざりしていました。その頃から受験産業には手をかすまいと決心しました。

〔順応主義教育を廃せ〕

受験第1主義は、画一的な順応主義的人間を大量生産する危険を常にはらんでいます。

当時の田中校長は「YES/NOをはっきりと言える人間になれ」とよくおっしゃいました。即ち、集団に自分の意見を埋没させないで、調和をはかりながらも、明確に自分の立場を主張することの重要さでしょう。

国際化時代に求められているのは、ことなかれ主義の人ではなく、的確に自己主張のできる人なのです。

（早稲田大学教授・NHK基礎英語講師 62回）

大学生からの便り

翠辮影を浮かべては…… 吉田 寛

第35回翠辮祭に実行委員長として関わり、ファイヤーストームの火の前に友と流した涙は、今でも昨日のように思い起こされます。翠辮祭は私が高校時代最も情熱を注いだものであり、初めて友と一緒に自分たちの手で造りあげたと実感できるものでした。

どんなに苦しくても辛くても歩まなくてはならない道があることをそして

翠辮祭というこの世で一番素敵な舞台では

誰もが皆、主人公だと

これを読んだとき、私は何と素晴らしい友をもったことかと感動し、

半年間、一日も欠かすことなしに翠辮祭について考え、友と議論し準備を進めました。そして、その友との語らひは翠辮祭にとどまらず、学校のこと、彼女のこと、政治のこと、読んだ本のこと、音楽のことなどなど、様々なことに及び、その中で自分自身を見つめ直し自己形成を行っていたのです。また、夜遅くまで準備したときの、あの真下商店で買ったカップラーメンとチェリオの味には格別なものがありました。そんな半年を過ごした後の翠辮祭直前合宿、一週間殆ど徹夜の中で友が残した言葉に、今でも忘れないものがあります。

今 今の時の流れの中で同じ道歩んだ友よ 忘れないでくれ

私も高々を卒業し、翠辮祭を卒業して新しい舞台に挑んでいます。しかし、今自分の基準になっているのは、あの時形成された価値観であり、あの時と変わらぬ情熱です。そして、これから進んでいく医学の道も、あの熱い心を忘れずに一歩一歩真剣に歩んでいきたいと思っています。

（東北大学医学部二年 87回）

同窓会だより

母校に本の寄贈

「土屋文明私観」 原一雄著

去る平成三年九月九日、財団法人高崎哲学堂設立の会の理事長、井上房一郎氏（15回）より、本校職員、全生徒にと、元同窓会長を務められた原一雄氏（29回）の書かれた「土屋文明私観」が寄贈されました。寄贈式には校長、教頭をはじめ、生徒会長、弁論部、新聞部、文芸部の各部長など生徒の代表者も出席し、井上氏より寄贈を受けました。

同書は、平成二年十二月八日に亡くなられた、本校第八回卒の、日本を代表する歌人土屋文明氏の生いたち、人柄、歌集、原氏との交友などを一四七ページにわたって著したもので、ありし日の文明氏の姿が彷彿として浮かんでくる作品となっています。

高々の生徒たちも、母校の大先輩である文



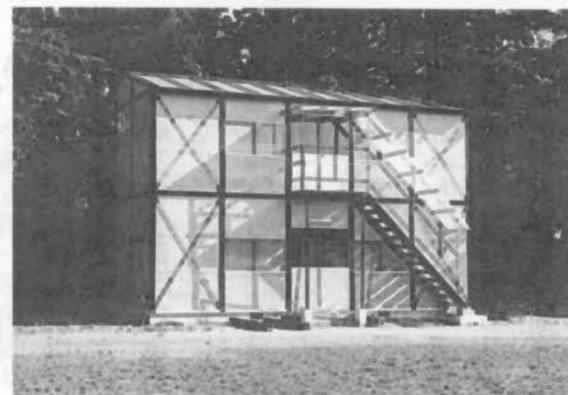
明氏の素顔や業績の偉大さに、改めて驚いていくようにした。

文明氏のご冥福をお祈りすると同時に、この書を著された原氏、高崎哲学堂設立の会の皆様に感謝申し上げます。

（同窓会報係 箕輪 明 70回）

プレハブの更衣室完成

長い間学校警備員としてご苦勞いただいた吉井正明さんが、本年三月退職され、本年度より夜間の学校警備を警備会社に委託することになりました。このため施設時刻が早められ、従来



教室で着替えをしていた（部室が狭く部員全員の収容不可能）校庭利用の運動部員が、屋外で着替えをし、私物もそこに置くという気の毒な状態におかれることになりました。

この状態を放置することは、健康上も防犯上も思わしくないため、これの改善が急がれましたが、予算面での制約もあり苦慮しておりましたところ、野球部OBで井上工業（株）常務の飯島勇（57回）氏のご尽力で写真のようなプレハブの更衣室が完成しました。そして、二学期より野球、ラグビー、サッカーの各部と軟式野球同好会の生徒が利用しております。寒風の吹き荒ぶ季節を迎え、生徒は大いにその恩恵に浴しており、必ずや部活動の輝かしい成果をもたらしてくれると期待しております。

（野球部長 田端 稔 54回）

叙勲者紹介

平成三年に叙勲された同窓生を御紹介いたします。現在までに事務局で把握している方々です。他にもご存知の方はご連絡ください。

平成二年度（追加）
勲四等瑞宝章（保健衛生功勞）
山口 健男（35回）

平成三年度
勲三等瑞宝章（地方自治功勞）
湯浅 正次（27回）

勲三等瑞宝章（裁判所事務功勞）
大塚 雅彦（38回）

勲四等旭日小綬章（地方自治功勞）
塚越 輝夫（36回）

勲四等瑞宝章（産業振興功勞）
茂木 三郎（35回）

勲五等双光旭日章（保健衛生功勞）
吉田 整（33回）

勲五等双光旭日章（教育功勞）
石川 頼母（30回）

勲五等双光旭日章（保健衛生功勞）
村田 欣哉（35回）

勲五等瑞宝章（学校保健功勞）
吉見 和夫（36回）

勲五等瑞宝章（教育功勞、地方文化功勞）
塚田 亨（旧職員）

◇学芸部報告◇

吹奏楽部 二年ぶり県代表
美術部・写真部は全国総合文化祭出品
新聞部 知事賞に輝く
囲碁・将棋部 全国大会出場



第47回関東吹奏楽コンクール (9月22日、新潟県民会館にて)

〈囲碁・将棋部〉

第六回関東地区高校囲碁選手権大会は、平成二年十二月二十六日千葉市で行われ優勝しました。また、全国高校囲碁選手権県予選団体戦で優勝し、全国大会に出場しました。

(顧問 茂木道弘 70回)

将棋は、全国高校将棋選手権県予選団体戦で優勝し、全国大会に出場しました。個人戦でも榊原直之(二年)が優勝し、全国大会に出場しました。

(顧問 小笠原祐治 75回)

〈新聞部〉

上毛新聞社主催第五回高校新聞コンクールにおいて、最優秀賞である知事賞を受賞する栄誉に輝きました。三年生を中心とした部員の一人ひとりが紙面に注ぎ込んだ情熱や努力が評価され

〈平成3年度職員異動〉

○転出者

職名	氏名	教科	転校	任等	備考
特別講師	石沢 信久	英	退	職	教頭
教諭	川嶋 尚武	語	退	職	
教諭	徳安 茂弘	理	退	職	
教諭	佐藤 忠弘	数	前市	職	
教諭	田多 澄男	学	藤	職	
教諭	原田 光男	英	富	職	
教諭	真砂 芳夫	国	富	職	
教諭	塚田 元樹	保	富	職	
教諭	服部 威宏	社	富	職	
教諭	大森 保男	理	武	職	
通信制教頭	今井 保男		武	職	
特別講師	立川 栄	国	退	職	

○転入者

職名	氏名	教科	前任校
教頭	萩原 重樹	数	妻 妻
教諭	品川 和男	理	市 市
教諭	植原 政明	社	伊 東
教諭	立見 賢治	体	高 商
教諭	塚越 究	理	伊 商
教諭	長岡 秀一	英	桐 西
教諭	栗原 大	数	伊 東
教諭	樽見 尚	社	高 東
教諭	市川 敏弘	国	高 東
教諭	木暮 弘	体	高 東
教諭	中谷 賢一	理	大 泉

たものと思われる。今回の受賞が本校新聞部の一層の飛躍の契機となるよう、今後も精一杯頑張りたいと考えています。(顧問 飯塚 光 69回)

「知事賞を受賞して」

「高崎高校新聞」の紙面数の多さは伝統的で、量という点に関しては県内はもとより、全国でもトップクラスにあります。今回出品した「第三十九回翠巒記念号」はブランク版二十面に及び、土屋文明氏の特集記事をはじめ、高々生の受験意識調査、地域問題、湾岸戦争、環境問題や他校生も含めたアンケート等々、幅広い企画の盛り込まれた新聞でした。

二十面の新聞となると原稿を書くのが大変なのは当然ですが、広告集め等の目立たない作業の量も並ではありません。

せん。例年同様、下級生がこき使われた訳です。「せっかく新聞部に入ったのに、ろくに文章も書かせてもらえない」と僕も一年生の頃思いましたが、こうした陰の努力なしでは新聞はつくれないのです。こう考えようと、今回の知事賞受賞は部員全員の、いわばチームプレーによると言えますし、だからこそ僕たちにとっての知事賞の価値は深く、大きく感じられるのです。

一学期で三年生は引退。既に、優秀な(?)後輩たちが新聞を発行しています。来年のコンクールでも高々新聞部は素晴らしい成績を収めるでしょう。

(新聞部前部長 三年 岩田夏弥)

〈写真部〉

昨年度に続き、県高校芸術祭におい

て、数百点出品された中から県代表に星野秀樹（二年）の作品が、平成三年八月坂出市で行われた全国総合文化祭に出品されました。

最近では、東京都の三浦印刷様ヤングカラーコンテストで学校賞に選ばれるなど部員みんな活躍しています。

（顧問 大山勝男 57回）

〈美術部〉

県高校芸術祭においては、参加校52校の中から昨年に続いて優秀学校賞を受賞しました。個人については新井宏児・高橋太の二名が受賞、優秀賞の新井宏児の作品は、平成三年八月高松市で開催された全国総合文化祭に出品されました。

（顧問 井田 淳一）

〈吹奏楽部〉

県吹奏楽コンクールで二年ぶりの県代表に選ばれ、九月二十二日新潟県民会館で関東大会に出場銅賞受賞。水戸一高も出場成績は同じ、終了後両校生数名が会話をしていたのが印象的でした。一、二年生は翌日より基礎練習が始まり頑張っています。

次に高崎市市内ホテルで開催される同窓会新年総会に毎年演奏をさせていただけられることを、そして先輩の方々が喜んでくださることを、生徒は誇りとしています。顧問としても厚くお礼申し上げます。（顧問 波戸場研一 52回）

◇運動部報告◇

関東大会出場

陸上・軟庭・水泳・柔道・山岳 全国大会出場 軟庭（個人二組）

高々運動部も復活をかけて各部互いに競い合って成績も向上し、全国大会へ向けて頑張っております。特に今年の秋には校庭に照明がつけられ、グラウンドを使う野球部、ラグビー部、サッカー部等の練習は一段と熱気が感じられ今後の活躍が期待されます。

また勝ち上がりました。

その他インターハイ県予選ではバスケット部が優勝した桐生高に準決勝で惜敗し切符を逃してしまったのは惜しまれます。

又、関東大会、全国大会、国体等の大会に出場するチーム及び個人に対して翠辮体育会から激励金が贈られ、各部OB会からも大会出場に際し何時も多大な援助をいただき、補欠や新人も大会の雰囲気慣れ、次の大会へのステップとして大いに役立たせていただき、有意義に使わせてもらい感謝しております。

今年の各部活躍状況を報告します。

- ①平成三年度県総合体育大会
 - ②関東大会県予選会
 - ③全国大会県予選会
 - ④新人大会
- 注) ①②は兼ねる種目あり

◎軟式陸球

- ①団体5位 準々決勝（高崎0-2 農二）、関東大会出場：個人（篠澤・江原）
- ③団体3位（高崎0-2前商）イン

◎水泳

- ①総合5位、個人2位百米バタフライ（小安）、3位四百米個人メドレー（小安）、3位千五百米自由形（生方）、5位八百米R（中曾根・小安・菊地・生方）、6位百米バタフライ（中曾根）、6位二百米個人メドレー（中曾根）、6位四百米メドレーR（菊地・坂本・小安・生方）、7位百米平泳ぎ（神）
- ②1位百米、二百米バタフライ（小安）、3位四百米メドレーR（中曾根・坂本・小安・菊地）、4位百米バタフライ、二百米個人メドレー（中曾根）、5位四百米メドレー（小安・生方・菊地・中曾根）、6位二百米平泳ぎ（坂本）
- ③1位千五百米自由形（生方）、2位二百・四百米自由形、四百米メドレーR、3位五十米自由形、百米平泳ぎ、百・二百米バタフライ、四百米個人メドレー、八百米リレー、4位百米平泳ぎ、千五百米自由形、5位四百米自由形、6位五

- ④団体3位（高崎1-2農二）、個人2位（篠澤・佐藤）5位（高田・須藤）、一年生大会個人2位（内田・広瀬）

十・二百・四百米自由形、6位百
・二百米平泳ぎ（入賞十八種目）

陸上

①5位四百米R（神保・森脇・植原
・佐々木）、関東大会出場（宇都
宮）：四百米R

柔道

①5位、関東大会出場（水戸市）予
選リーグ：高崎0—2水戸短付、
高崎2—3桐陰学園

②3回戦ベスト8、個人—86kg級3
位（永岡）、学年別大会：一年—
86kg級1位（永岡）、+96kg級5
位（斉藤）、71kg級5位（綱島）

県強化選手選考会：2位（永岡）
3位（佐藤）

山岳

①8位（山本・行田・持田・須永）
関東大会出場（群馬県白砂山系）
④4位 一年（新井）
山田昇記念登山大会：三枝賞（持
田）

バスケットボール

①5位、準々決勝 高崎50—55前工
③3位、準決勝 高崎57—83桐生

バレーボール

①ベスト16
③ベスト16 秋季大会：11月17日—
24日

野球

①春季大会：3回戦 高崎3—4高
工、全国大会県予選会：1回戦

高崎2—8伊勢崎東
②秋季大会：準々決勝 高崎6—7
高工（ベスト8）

軟式野球

①3位 準決勝 高崎2—3×高工
③2回戦 高崎4—5前工

ラグビー

①3回戦 高崎9—23伊東
③高崎9—20前商

サッカー

①8位、4回戦 高崎0—6前商
③2回戦 高崎0—0館商工、
県高校サッカー選手権 県大会
1回戦 高崎0—3西邑楽

テニス

①個人W8位（本間・米沼組）
③同8位

卓球

④準々決勝 高崎2—3太田
①5位 準々決勝 高崎0—3渋川
③3回戦 高崎2—3中央

弓道

①団体8位

剣道

①3回戦 高崎1—4前商
③2回戦 高崎2—3渋川
④3回戦 高崎0—4農大二、秋季
大会：1回戦 高崎1—3桐生

空手道

①団体組手2回戦 高崎0—4中央
個人組手5回戦（宮川）、4回戦
（金田）

第45回 高高・前高定期戦

部対抗	種目	一般対抗		
		前高	高高	
前高	水泳	6	3	
前高	綱引き	3	6	
前高	ソフトボール	3	6	
前高	駅伝	3	6	
前高	玉入れ	3	6	
6	陸上競技	0	0	
0	バスケットボール	5	4	
6	バレーボール	9	3	
6	軟式庭球	6	3	
6	卓球	4	5	
0	硬式野球			
6	軟式野球			
6	剣道			
0	柔道			
0	空手道			
6	弓道			
0	テニス			
6	サッカー			
6	ラグビー			
54	小計	48	42	
前高	102	総合	72	高高

三連勝成らず

今回の定期戦は自分にとって三度目
の、そして高校生活最後のものだった。
一昨年、昨年と高々が連勝し、実行委
員も三連勝を心に誓い活動に励んだ。

十月二日、本大会。前日の雨がうそ
だったように空は晴れわたり、秋の日
差しがまぶしかった。今年の前哨戦で
苦戦し、9対18と前高リードで始まる
本大会であったが、生徒のまずまずの
練習状況と、一昨年、高々がホームグ
ランドで逆転勝ちをした例もあり、今
年も勝てそうな気がした。

午前九時、各競技が始まり、本部席
から両校生徒の繰り広げる熱戦を見て
いた。一般対抗が奮闘したが、部対抗
は振るわず、最後の種目が終わらない
うちに結果がでて、三十点差で負けた。

悔しくて無性に腹が立った。

あれから一月たち、今ではあの虚し
い敗北感もにがい過去の記憶として他
の青春の記憶と共に僕の心に焼きつい
ている。高校生活でのこの貴重な経験
だった定期戦を一生忘れないだろう。
（定期戦実行委員長 秋葉 隆生）

●翠巒文庫●
BOOK

本校図書館の一画に翠巒文庫という
コーナーがあります。これは本校の卒
業生や、本校にゆかりのある方々が寄
贈して下さった本を集めて展示し、在
校生に利用させる場所です。歌
集から物理学の研究書に到るまで、あ
らゆる分野にわたっています。
現在（平成三年十月三十一日）まで

平成2年度 同窓会経常会計決算

(平成2年1月1日~平成2年12月31日)

平成2年度 経常会計

収入の部

費目	平成2年度予算	平成2年度実収入	備考
前年度からの繰越金	613,729	613,729	
入会金	850,000	854,000	全日制406 通信制21
維持会費	5,000,000	5,697,000	
利息	40,000	56,211	
雑収入	0	201,000	
合計	6,503,729	7,421,940	

支出の部

費目	平成2年度予算	平成2年度実支出	備考
会議費	800,000	867,260	平成3年度総会補助30万他
祝賀費	300,000	872,270	ネクタイピン、卒業証書ファイル他
雑費	250,000	369,000	平成2年度転退職員へ
慶弔費	100,000	120,300	葬儀花輪代
通信印刷費	500,000	329,918	維持会費納入礼状10万、宛名タック他
旅費	100,000	50,000	京浜同窓会出席者
会報発送費	1,300,000	1,200,000	会報発送郵送料
同窓会報費	1,300,000	1,348,268	会報編集・印刷費
事務費	600,000	254,900	人件費、事務用品代他
同窓会長賞費	100,000	46,810	ガラス盾
補助費	600,000	600,000	図書館30万、翠樹体育会30万
雑費	50,000	539,510	ファックス他
予備費	203,729	0	
合計	6,503,729	6,598,236	

差引残高 823,704
 100周年基金へ 500,000
 次年度への繰越し 323,704

経常会計・特別会計について上記のとおり報告します。

平成3年1月21日

高高同窓会会計

本 幕 嶋 夫 二
 飯 野 良 眞
 矢 島 哲 雄

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。

平成3年1月21日

高高同窓会監査

石 井 敬之助
 安 藤 眞太郎

平成3年度 同窓会経常会計予算

(平成3年1月1日~平成3年12月31日)

収入の部

費目	金額	備考
繰越金	323,704	
入会金	850,000	
維持会費	5,500,000	
利息	40,000	
雑収入	1,000	
合計	6,714,704	

支出の部

費目	金額	前年比(増○減▽)
会議費	900,000	○ 100,000
祝賀費	600,000	
雑費	300,000	○ 50,000
慶弔費	100,000	
通信印刷費	500,000	
旅費	100,000	
会報発送費	1,300,000	
同窓会報費	1,400,000	○ 100,000
事務費	600,000	
同窓会長賞費	100,000	
補助費	600,000	
雑費	50,000	
予備費	164,704	▽ 39,025
合計	6,714,704	

平成2年度 同窓会特別会計決算

種別	金額	支出なし
繰越金	10,100,000	
利息	312,697	
合計	10,412,697	

創立100周年準備基金特別会計決算

種別	金額	支出なし
繰越金	4,552,211	
利息	135,580	
平成2年度経常会計より	500,000	
合計	5,187,791	

第90回 高高同窓会
 新年総会へのお誘い

高高同窓会の皆様におかれましてはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本年一月二十六日、当番期代表者から同窓会のキーのパトントッチをうけてから早くも一年を迎えようとしています。

恒例となった高高同窓会新年総会も、先輩の方々の努力で年々盛況を極めてきています。今年度の当番期である我々としても、先輩たちの築いた伝統にはじない総会にしたいと一丸となって努力しております。

なお、総会後の懇親会には懐かしき友と旧交をあたため、楽しい一時を過ごしていただきたいと趣向を凝らしております。

同窓生の皆様、是非来年一月の新年総会に御出席下さい。当番期一同心よりお待ち申し上げます。

期日 平成四年一月二五日(土)
 時間 午後三時
 場所 高崎ビューホテル
 会費 五〇〇〇円
 (61回当番期代表者 本間良和)

事務局だより

同窓会は会員各位の納入して下さる二千円の会費で運営されています。同封の振込用紙で納入して下さい。よろしくお願ひ申し上げます。

「次回の同窓会会員名簿刊行は一九九二年です」

類似の職業別名簿が本同窓会とは全く関係のない機関で作成され、高額の料金で販売されているようですのでご注意ください。

本同窓会の会員名簿は、一九九一年六月より準備が始められ、九二年五月末に刊行の予定です。現在卒業生の八五%の確認が終り、残り十五%の確認作業に入っています。ご協力をお願い致します。なお名簿についての問い合わせは〇二〇一〇〇〇九二七で受け付けております。

編集後記

平成三年も残りわずかになりましたが多くの方々の御協力により、同窓会報25号が発刊の運びとなりました。

編集担当が変わり戸惑うことも多く発刊が遅れたことをお詫び申し上げます。また、御多忙の中、貴重な原稿をお寄せ下さいました皆様方に厚く御礼申し上げます。(本部幹事会)